

西ノ原遺跡 石堂遺跡

県営圃場整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報

1986, 3

高根町教育委員会
峡北土地改良事務所

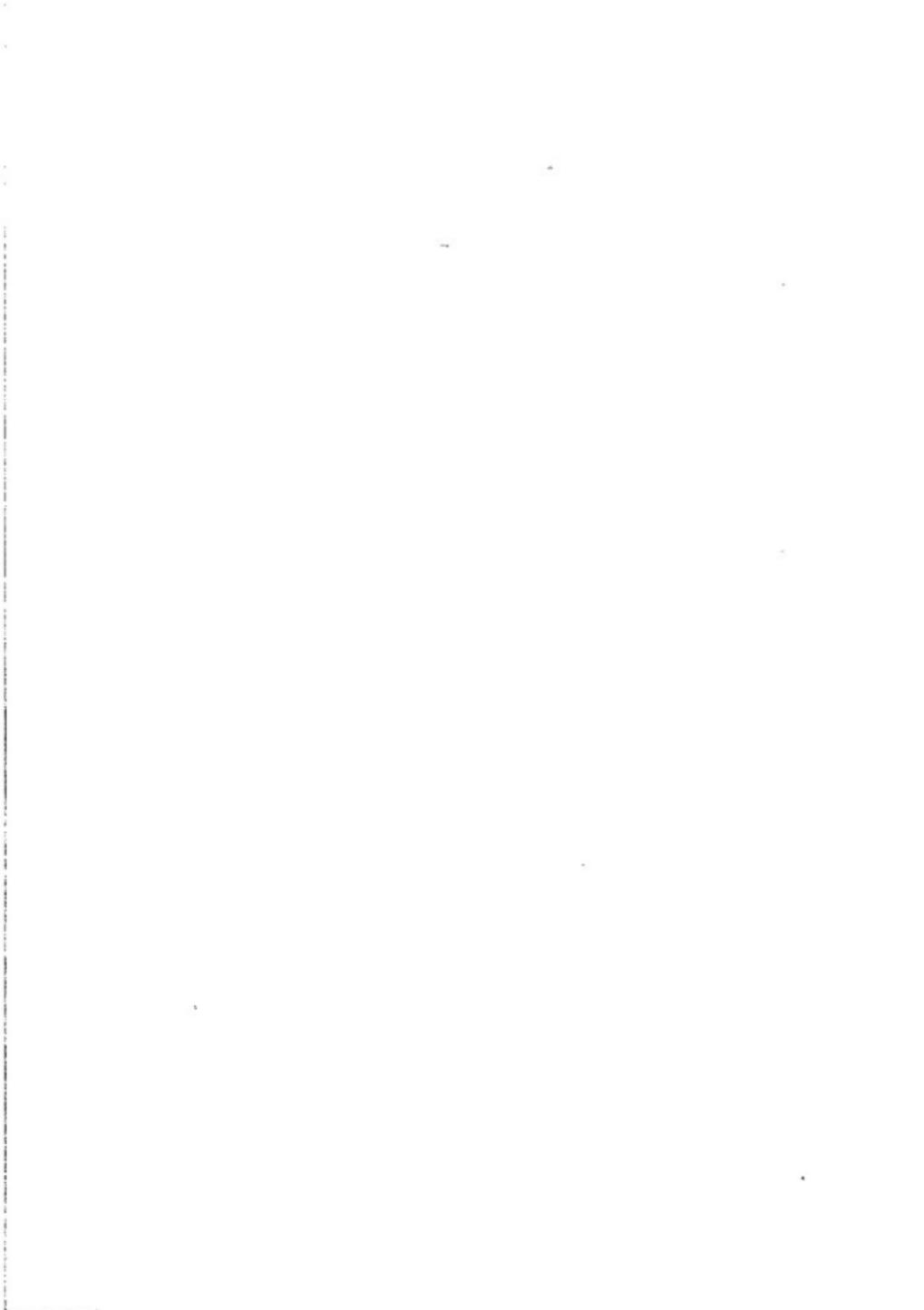
西ノ原遺跡 石堂遺跡

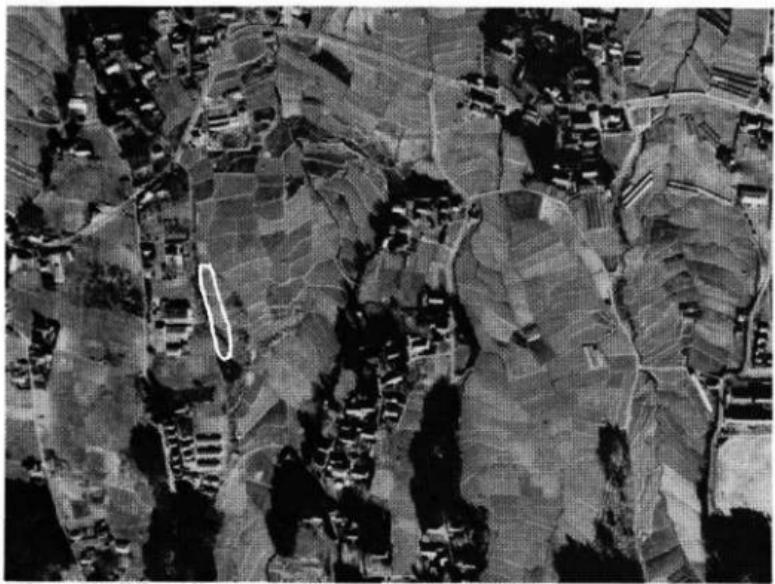
県営圃場整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報

1986,3

高根町教育委員会
峡北土地改良事務所

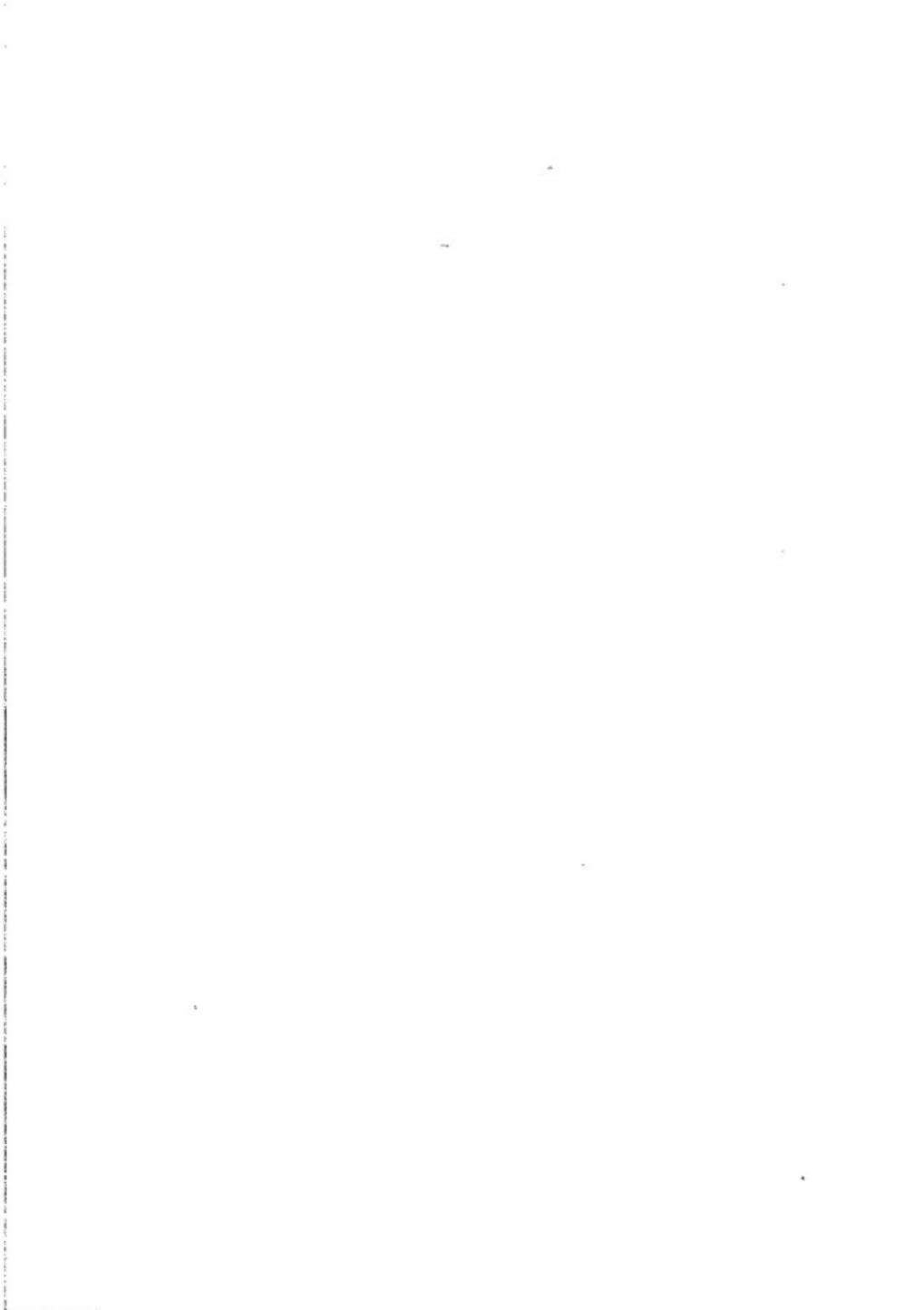




図版1 地場整備以前航空写真（西ノ原付近）



図版2 地場整備以前航空写真（石堂付近）





図版 3



图版4



图版5



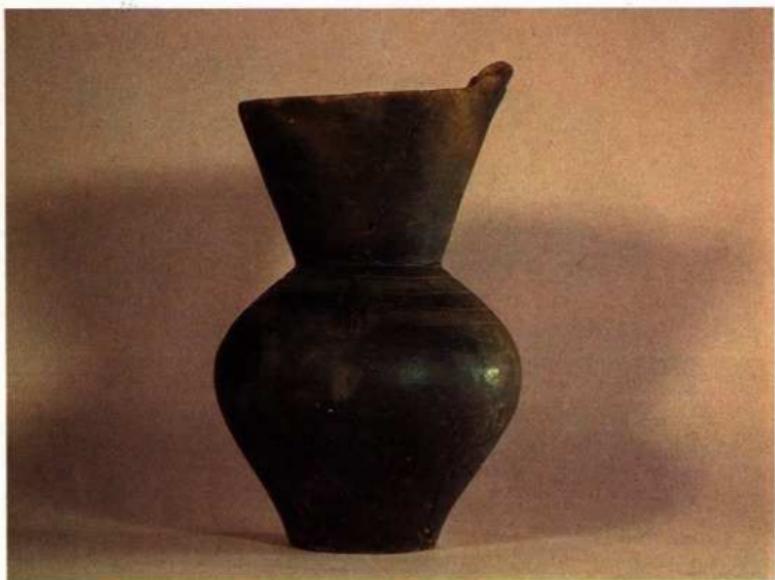
图版 6



图版 7



图版 8



图版 9

序にかえて

高根町において、昭和54年より県営圃場整備事業を行ってまいりました。その過程の中で、高根町の歴史を少しづつですが、紐を繕き、解明してきました。その歴史は、山梨県ばかりでなく、全国的なレベルでの、発見がありました。中でも青木遺跡、東久保遺跡などの発見は、日本の中の甲斐国的位置づけ、すなわち甲斐国の中の駿北地域の存在を記すものであり、連綿と流れる歴史の一頁を、鮮やかに染めるものであります。

本年度調査した石堂遺跡からは、縄文時代後期の配石遺構が検出され、一大祭祀遺跡との見解もあり、全国的レベルで見ても、屈指の遺跡であろうと思われます。

今回報告する遺跡は、上記のほかに西ノ原遺跡も含まれています。この遺跡は、当町において始めて調査された、古墳時代前期の遺跡であり、今後その動向が注目されるところであります。本町においては、これからも開発事業に伴う発掘調査が、数多く予測されますが、此の度の調査は、その一部であり、断片的なものであると考え、今後も先人達が残していく足跡を、系統的に整理・解明し、後世に伝えることが、現代に生きる我々の責務である、と考えております。最後に、今回の発掘調査に御協力下さった、関係者の方々に深く感謝の意を表わすと共に、今後の御協力を重ねてお願い申し上げます。

昭和61年3月31日

高根町教育委員会 中嶋新藏

例　　言

1. 本書は、県営圃場整備事業に伴う、西ノ原及び石堂遺跡の埋蔵文化財発掘調査の概報である。
2. 本調査は、候北土地改良事務所との負担協定及び文化庁、山梨県より補助金を受けて、高根町教育委員会が実施した。
3. 西ノ原遺跡は、高根町村山西割字西ノ原に所在した。
4. 石堂遺跡のA区は、高根町東井出字石堂に、B区は東井出字西久保に所在した。
5. 調査は、昭和60年7月8日から8月15日までが西ノ原遺跡、8月19日から12月17日までが石堂遺跡の実施期間である。
6. 石堂遺跡については、検出された遺構が、特殊であるため、県文化課、候北土地改良事務所、県企画管理局の三者が協議を行った結果、一部を昭和61年度に再調査を行うこととし、埋土保存が決まった。
7. 石堂遺跡の全測図は、シン航空写真株式会社によるものである。
8. 遺物実測は、跡部、植松、清水、高柳、中嶋、原が、トレースは浅川、佐藤が、写真は雨宮、原が、執筆、編集とも雨宮が行った。
9. 発掘調査及び本書作成にあたって、次の諸先生方、諸機関より御指導、助言をいただいた。記して感謝申し上げる次第である。

末木健 新津健 八巻与志雄 小野正文 米田明訓 長沢宏昌 山路恭之助 深沢裕三
佐野勝広 山下孝司 横原功一 富沢公雄 平野修 鈴木治彦 武藤雄六 小林公明
権川誠司 候北土地改良事務所 県文化課 県埋蔵文化財センター 県考古博物館
富士見町井戸尻考古館 大泉村歴史民俗資料館 (順不同 敬称略)
10. 本調査における記録、出土品は、高根町教育委員会が保管している。
11. 発掘調査組織
調査主体 高根町教育委員会教育長 矢崎弥一 (昭和61年3月22日 退職)
中嶋新蔵 (昭和61年3月29日 就任)
- 調査担当 雨宮正樹
調査事務局 社会教育係長 白倉民雄
社会教育主事 原 一元
主事 小尾善彦
12. 調査指導 山梨県教育委員会
13. 発掘調査作業員

赤岡賢之 有賀五・ 川端下昭二 川端下成男 輿水義一 原敦 原敬一 原与敬
植藤原芳郎 川端下みつじ 川端下圭子 佐藤法子 坂本たか子 高柳静香 原きのえ
原智里子 八巻栄 八巻久子 中嶋桂 原辰也 植松美和 奥山淳子 藤原真紀
(以上西ノ原遺跡)

植松武男 植松種三 内田誠一 輿水義一 佐藤原芳郎 油井昌悦 秋山なみ子
浅川繁子 植松むつよ 植松志げ子 植松三千枝 植松梅子 植松千鶴子 内田ら司
長田さだえ 川端下圭子 輿水池鶴子 坂本たか子 佐藤法子 白倉もと 高柳静香
田中恒子 仲嶋まゆみ 原智里子 半井まきえ 八巻栄 八巻久子 油井さくぢ
田村弘幸 山嶋桂 原辰也 (以上石堂遺跡)
14. 遺物整理作業員
浅川繁子 植松梅子 川端下圭子 坂本たか子 佐藤法子 高柳静香 仲嶋まゆみ
跡部浩史 清水雅史 中嶋桂 原辰也 手塚智恵子

目 次

序にかえて

例 言

目 次

I 調査に至る経過	11
II 遺跡の歴史的・地理的環境	13
III 遺跡の概要	21
IV 出土遺物	32
V まとめ	36
おわりに	38
参考文献	38

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置	12
第2図 西ノ原遺跡付近地形図	14
第3図 石堂遺跡付近地形図	15
第4図 西ノ原遺跡、石堂遺跡A地区全測図	16
第5図 石堂遺跡B地区全測図	17
第6図 石堂遺跡B地区遺構配置図	19~20
第7図 第1号住居址実測図	22
第8図 石空遺跡A地区第1号住居址実測図	24
第9図 石堂遺跡B地区第3号住居址実測図	27
第10図 石堂遺跡B地区第6号祭壇状遺構実測図	30
第11図 石堂遺跡B地区第2号石積状遺構実測図	31
第12図 石堂遺跡B地区出土耳飾実測図	34
第13図 石堂遺跡B地区出土土偶実測図	35

図 版 目 次

図版1 石堂遺跡以前航空写真(西ノ原付近)	
図版2 石堂遺跡以前航空写真(石堂付近)	
図版3 石堂遺跡B地区調査航空写真	
図版4 石堂遺跡B地区出土石棒写真	
図版5 石堂遺跡B地区出土土偶写真	
図版6 石堂遺跡B地区出土耳飾写真	
図版7 石堂遺跡B地区出土石器写真	
図版8 石堂遺跡B地区出土翡翠写真	
図版9 石堂遺跡B地区出土土器写真	
図版10 西ノ原遺跡遺骨	21
図版11 西ノ原遺跡第1号住居址遺物出土状況	21
図版12 西ノ原遺跡第1号住居址完掘状況	21
図版13 石堂遺跡A地区遺骨	23
図版14 石堂遺跡A地区近景	23
図版15 石堂遺跡A地区第1号住居址完掘状況	23
図版16 石堂遺跡B地区遺骨	25
図版17 石堂遺跡B地区近景(北側より)	25
図版18 石堂遺跡B地区近景(南側より)	25
図版19 石堂遺跡B地区第1号住居址(無石住居址)	28
図版20 石堂遺跡B地区第3号住居址(石圓住居址)	28
図版21 石堂遺跡B地区第3号住居址内鉢検出状況	28
図版22 石堂遺跡B地区第1号大型集石遺構	29
図版23 石堂遺跡B地区第1号小型集石遺構	29
図版24 石堂遺跡B地区第6号祭壇状遺構	29
図版25 石堂遺跡B地区第13号石堆状遺構	31
図版26 石堂遺跡B地区第3号住居址内特異遺構	32
図版27 石堂遺跡B地区第1号土墻	32
図版28 石堂遺跡B地区大型石棒出土状況	33
図版29 石堂遺跡B地区小型石棒出土状況	33

I. 調査に至る経過

高根町では、昭和54年より第3次全国総合開発計画に基づき、国、県より補助を受け、基盤整備事業の一環として、圃場整備事業を行なっている。この事業は、農耕地を整備、拡充することにより、農耕地（主に水田）をより有効かつ多角的に利用することを図り、農地を集約化し、機械力等を導入することにより、省力化を促進し、より大きな効果と利益を得ることを目的とするものである。

昭和60年度は、県営圃場整備事業として、村山西割工区が5ha、東井出工区が15ha、団体営圃整備事業として、箕輪新町工区が5ha、蕨原工区が3ha、新田大林工区が3ha、下黒沢工区が3haなどが事業として計画され、昭和60年11月に、高根町教育委員会により現地踏査を実施し、遺跡の有無を検討し、有りそうな工区を3ヶ所に絞った。その3ヶ所とは、村山西割工区、東井出工区と箕輪新町工区であり、村山西割工区の西側と東側の尾根には、縄文前期から平安、中世までの土器が散布していた。東井出工区は、東側の尾根には、昭和58年より、京都大学、山梨県立短期大学などが調査を行なっている「野添遺跡」がある。箕輪新町工区の西側の尾根には、縄文時代中期の土器が散布している。これらのことにより、歴史的に非常に重要な地区であることから、試掘調査を実施することとした。

試掘調査は、昭和60年4月、当教育委員会が主体となり実施した。調査方法は、調査対象面積が、25haと大規模なため、重機を使用した。重機はバックホーを使い、バケットのツメを、鉄板でつぶし、バケットの幅でトレーナーを掘る方法を取り、計画区の全域を調査した。

その結果、村山西割工区からは、縄文時代中期の土器片および石器が、東井出工区からは、2ヶ所から、縄文時代中期と後期の土器および石器が出土したが、箕輪新町工区からは、確認できなかった。以上のことから、県文化課、県北土地改良事務所と3者で協議を行なった結果、村山西割と東井出工区の2ヶ所を、記録保存を前提とした調査をすることとなった。

調査面積は、村山西割工区が3000m²、東井出工区が7000m²の合計 10000m²、調査主体は町教育委員会が実施することとした。

本調査は、西ノ原遺跡が昭和60年7月8日から8月15日まで、石堂遺跡A地区が8月19日から9月10日まで、B地区は、9月9日から着手したが、調査が進むにつれて、当初計画で予想された遺跡より遺構の特殊性、遺構の石群等により調査は進転せず、計画変更をせざるを得なくなり、昭和61年1月9日、文化庁長官宛に計画変更承認申請書を、また県北土地改良事務所長に埋蔵文化財発掘調査協定額変更申請書をそれぞれ提出した。

調査は、昭和60年12月17日までに上部構造の確認調査を終了したが、再度県文化課と県北土地改良事務所が協議を行なったが、結論が出て、県企画管理局で調整を行なった結果、遺跡内的一部を調査（記録保存）し、残りは埋戻して水田を造成することになった。



第1図 遺跡位置図

II. 遺跡の地理的歴史的環境

高根町を含む一帯は、候北地方と呼ばれ、その北部は八ヶ岳を境にして長野県と接している。この地方は、古来巨摩郡と呼ばれ、馬の一大生産地あるいは、甲斐源氏発祥地とされているが、現在においてこれらあるいはそれ以前の歴史的文化遺産は、地中深く眠っているが、近年土地開発行為が多くなってきており、損失の危機にさらされているが、國場整備事業に先立つ埋蔵文化財の発掘調査などにより、記録保存が進んでいる。

八ヶ岳は、中央構造線の一つである、フォッサーマグナ(糸魚川—静岡構造線)の上に地質時代の第三紀末(今からおよそ200万年前)から第四紀洪積世にかけて噴火した死火山である。西ノ原遺跡および石堂遺跡が、立地している地質は、第四紀以降に降ったローム層を掘り込んで作られている。このローム層が、降り積っている台地は、八ヶ岳が噴火した際に流出した火砕泥流であり、それが長年須玉川、塩川および釜無川によって形成された、川との比高100m、南北20数kmの南北に細長い台地となり、七里ヶ岩あるいは辺見台地とも呼ばれている。

そして、この台地上を流れる小河川は、台地上に小渓谷を刻みながら、前述の河川に流れこんでいる。この小河川に削られた台地上にも、南北に細長い台地があり、ここに縄文時代、平安時代、中世の城館址遺跡などが存在している。

八ヶ岳南西麓は、縄文時代の遺跡の宝庫といわれ、諏訪湖から高根町付近までを結ぶ、一本の回廊となり、縄文回廊と呼ぶべき、一大文化圏を構成している。

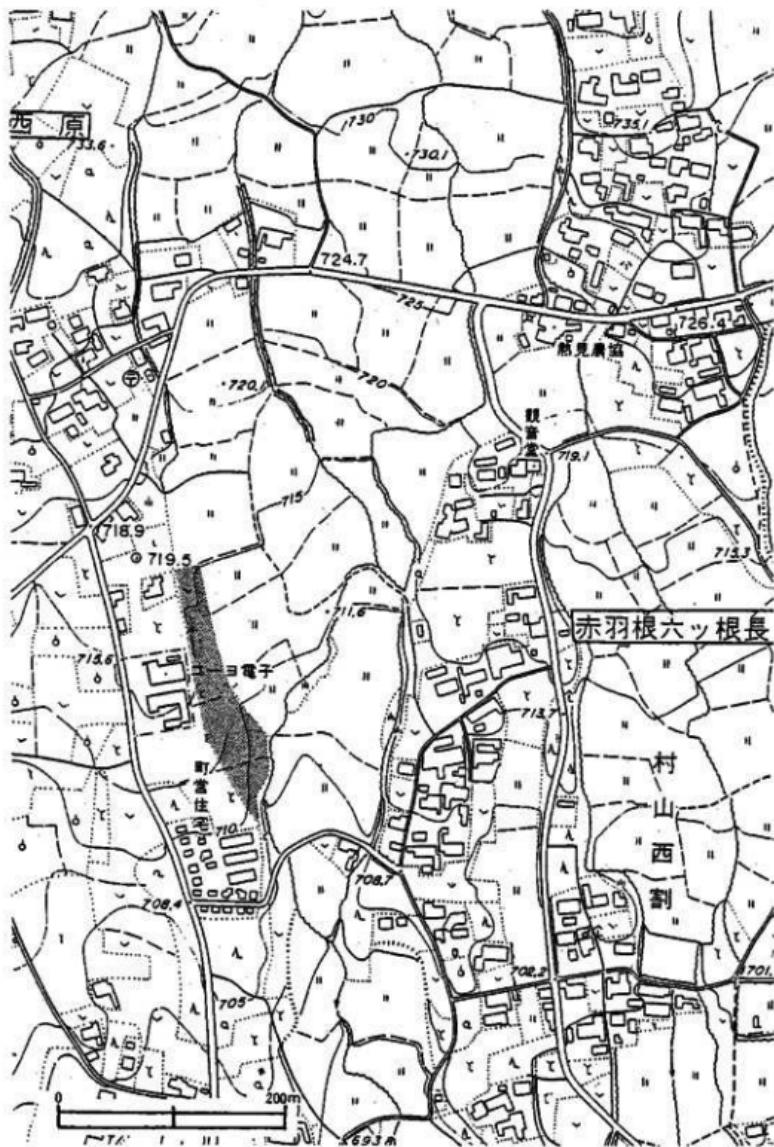
周辺の遺跡

前述のように、八ヶ岳南西麓は縄文時代の宝庫といわれ、特に中期においては一大文化の花が咲いたのごとく、遺跡の数は極端に多く見受けられ、縄文時代後・晚期においては衰退していったのではないかとされていた。ところが、昭和54年において、金生遺跡(8)が発掘された後、徐々ではあるが、増加してきたのである。

1. 石堂A遺跡 (縄文時代中期、平安時代)
 2. 石堂B遺跡 (縄文時代後、晚期)
 3. 西ノ原遺跡 (縄文時代中期、五頭)
 4. 野添遺跡 (縄文時代中期)
 5. 上ノ原B遺跡 (縄文時代中期)
 6. 天神遺跡 (縄文時代前期、中期)
 7. 大豆生田第3遺跡 (縄文時代後期、平安時代)
 8. 金生遺跡 (縄文時代後、晚期)
 9. 別当遺跡 (縄文時代後期)
 10. 柳坪遺跡 (縄文時代中期、弥生時代、平安時代)
- 以上の遺跡は、5を除き現在までに発掘調査された遺跡である。

調査方法

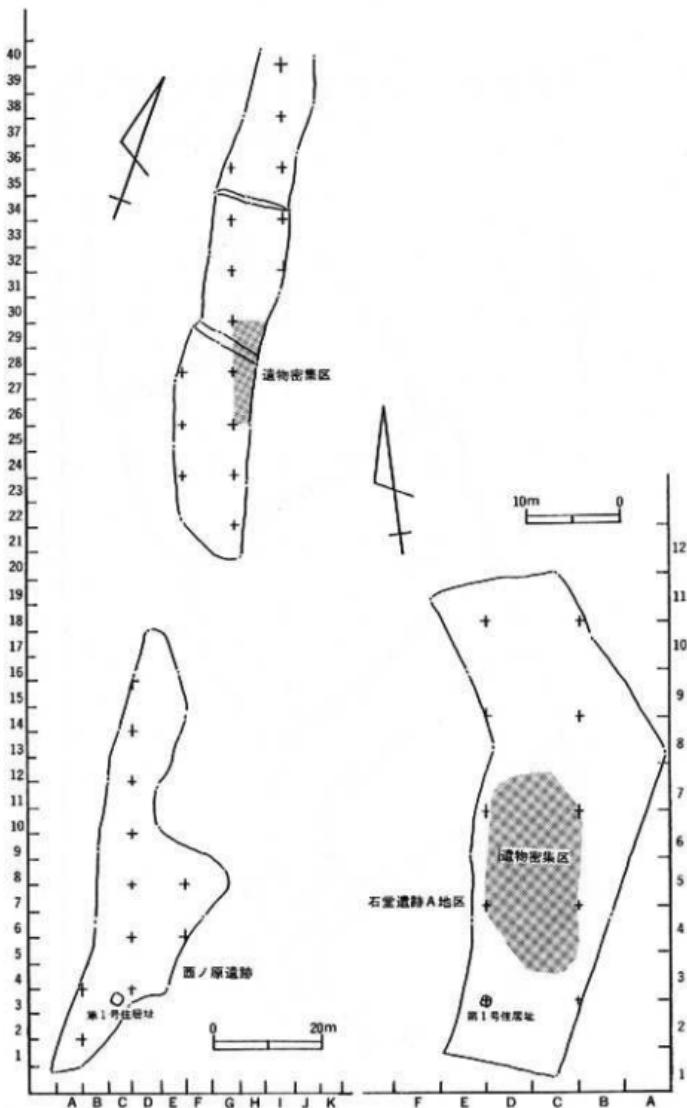
調査方法は、表土を重機によって、ローム層直上、または遺物包含層直上まで除去し、そこに地形に合せて、5m×5m方眼のグリッドを調査全域にかかるように設定し、遺跡内全域を動態がけを行い、精査し遺構を確認した段階で、遺構を掘り下げていった。



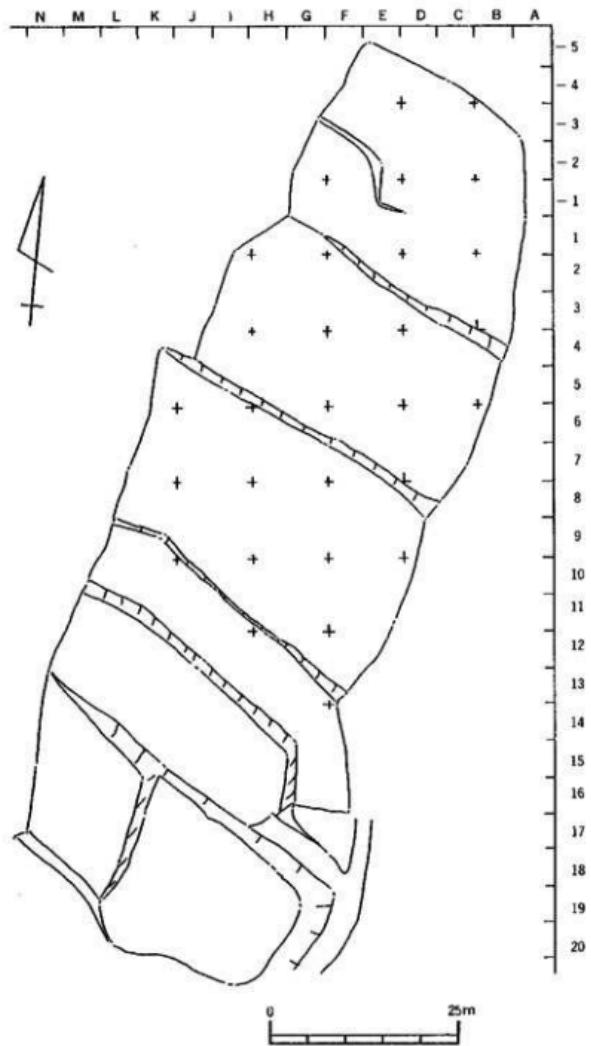
第2図 西ノ原遺跡周辺地形図 (1/5000)



第3図 石堂遺跡付近地形図 (1/5000)



第4図 西ノ原遺跡 石堂遺跡A地区全測図



第5図 石堂遺跡B地区全測図



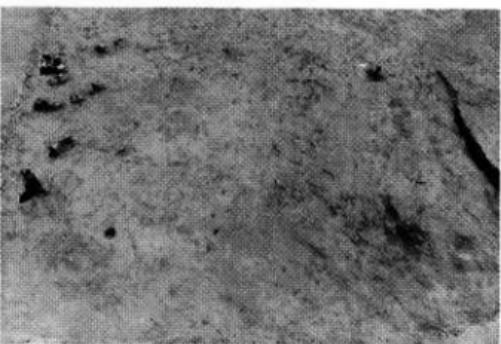
第 6 囖 石家河 B 地区 断块剖面图 (1 / 200)

III. 遺跡の概要



図版10 西ノ原遺跡遠景

昭和60年度において、調査を行った遺跡は、山梨県北巨摩郡高根町村山西割字西ノ原と、同町東井出字石堂と西久保に所在したが、遺跡について東井出の石堂は石堂遺跡A地区、西久保は石堂遺跡B地区と命名した。以下、各遺跡ごとに概要を説明していきたい。



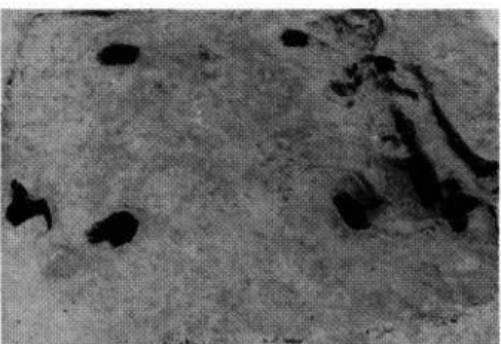
図版11 西ノ原遺跡第1号住居址遺物出土状況

1. 西ノ原遺跡

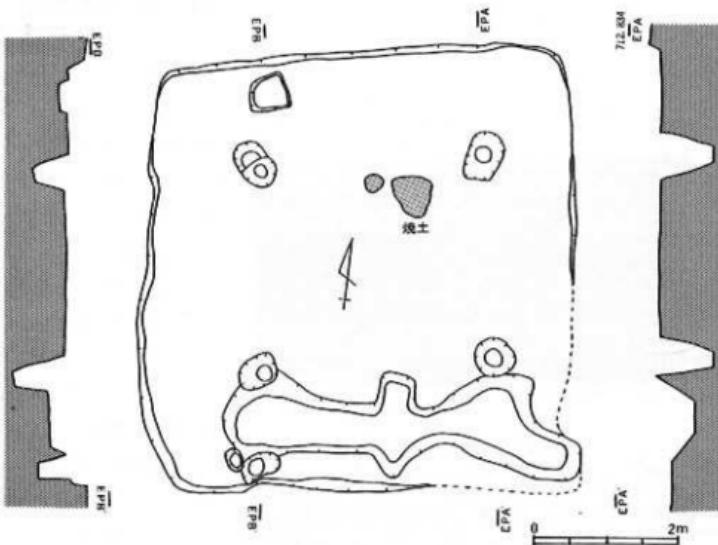
西ノ原遺跡は、標高約700mの高台とそれから東側に傾斜する斜面上に立地する。この付近は、古くから開けたところと思われ、旧名で熱見村といわれたところである。今回調査を行った所は、台地の一部と、その東側の微高地である。

検出された遺構は、五領期の住居址1軒と土壙10基で、尾根上に立地し、畑地であったためかなり削平されており、地表から床面までの深さは、深いところで20cm、南東の傾斜の強いところでは、壁の立上りは確認できなかったが、残っている壁などから推定すると、平面プランは、1辻6m前後の方形を呈すると思われ、規則性を持って4本の柱穴が掘られていた。

住居内の北東の柱穴を結んだ線



図版12 西ノ原遺跡第1号住居址完掘状況



第7図 第1号住居址実測図

の中に、火熱を受けた所があった。遺構内は、前述のとおり攪乱をかなり受けており、遺物は破損し、器台・高坏・甕などの破片のみであり、覆土中にかなり縄文土器が混入していた。

東側の傾斜地においては、黒色土中より縄文式土器が、まるで破棄されたごとく、一面に散乱し、折り重なった状態で出土している。これら出土している土器は、中期前葉から後葉にかけての土器と思われるが、出土量が多く断定はできないが、確認できるのは駿河期、藤内期井戸尻期までであろう。これら出土した土器をたんねんに取り上げ、精査を行ったが、遺構は検出できなかった。なお、調査区域外ではあるが、近所の畠地から縄文前期の土器を表探している。これらのことから、西ノ原遺跡を含むこの一帯は、縄文前期から中期にかけてと、古墳時代前期の集落址が存在すると思われる。

近年、北巨摩地方において、五傾期の遺跡としては、韮崎市の「坂井南遺跡」がある。当調査においては、住居址は1軒のみであるが、調査地点が尾根中央部東端であり、中心部をはずれていることから、今後検出される可能性はあると思われる。

2. 石堂遺跡A地区

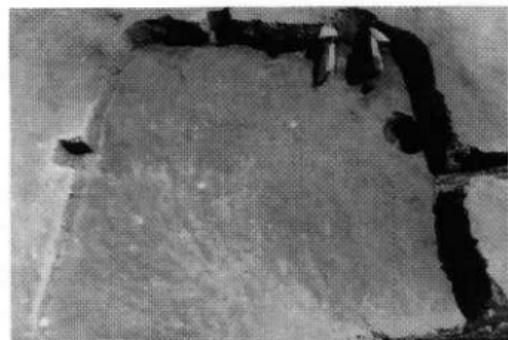
石堂遺跡は、調査対象地域が広いため、試掘調査を行った結果からA・B区に分けて調査を実施し、A地区は対象地域の東端にある。当地区は、標高約900mの尾根から下りきった平坦部に位置する。この尾根上には、「野添遺跡」があり、縄文中期の集落址として知られ



図版13 石堂遺跡A地区遠景



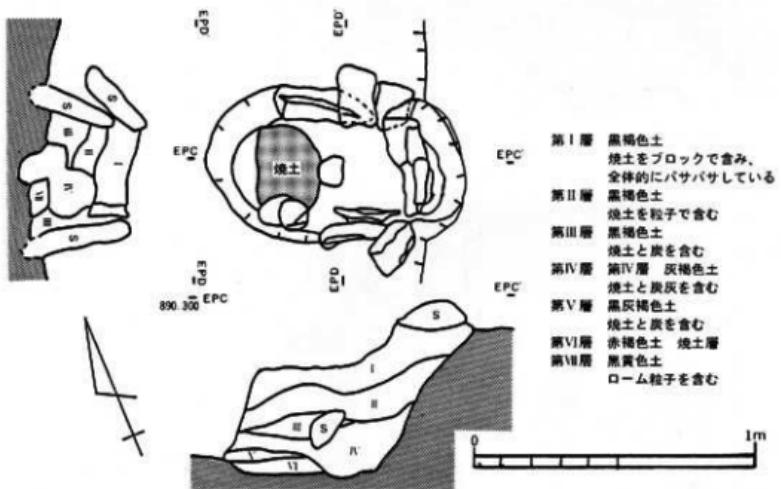
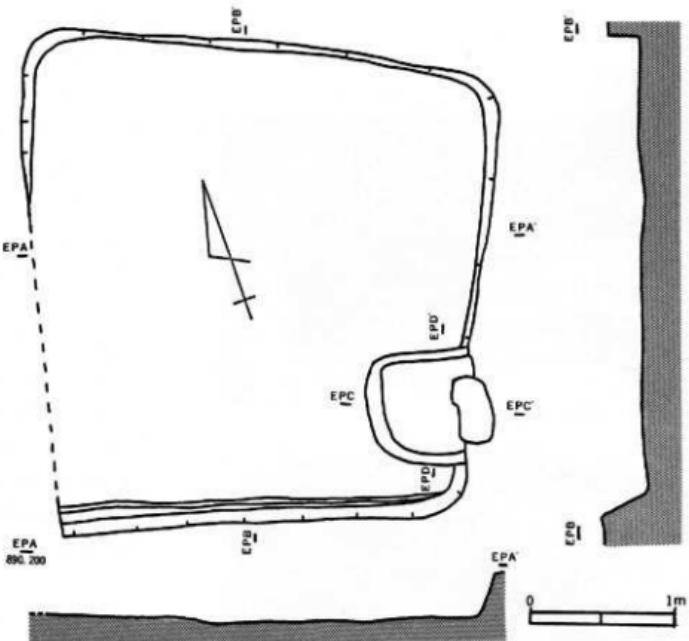
図版14 石堂遺跡A地区近景



図版15 石堂遺跡A地区第1号住居址完掘状況

ており、A地区はそのすぐ西側であるため、集落址の一部が存在すると思われた。実際、表土除去を行ったところ、縄文中期の土器が、黒色土中より、集中して出土する所と、散発的に出土する所があり、集中している所を精査したが、遺構は検出できなかった。

遺構が検出された場所は、発掘区の中の南端部にあたり、平安期の住居址1軒である。調査面積約3000m²であり、確認された住居址は住居址1軒であるため、同時期の遺構のあり方は、かなり散在的なものであろうと思われる。検出された住居址は、西と北側は黒色土を掘り込んで、構築されているため正確な掘り込み面は不明であるが、1辺4m前後で、やや小型な隅丸方形の住居址である。カマドは東壁で中心よりやや南側よりに構築された石組カマドであった。この住居址は、火災によって破壊された住居址であるため、比較的遺物の残りは良かったが、二次焼成の火熱を受けているため、灰釉陶器の釉薬はもろくなり、器体自体もかなり破損していた。环は3点ほど、床面にふせた状態で出土し、2点はふせて、重ね合せた状態で出土している。このふせた土



第8図 石堂遺跡A地区 第1号住居址実測図



図版16 石堂遺跡B地区遠景



図版17 石堂遺跡近景(北側より)



図版18 石堂遺跡近景(南側より)

器の内側には、ワラ状の炭化物と板状の炭化物が付着していた。カマドの中にも、ほぼ完形の甕が、上部構造が焼け落ちた時に、破損したらしく、カマドの中にくずれ落した状態で出土している。これらの出土している土器は、甲斐型の土器であり、10世紀後半代とされるものである。

3. 石堂遺跡B地区

A地区より西へ直線距離で400mほど離れた、尾根の西側の標高約900mの南西方向に広げた緩傾斜地上に立地する。この遺跡を地理的に観ると、東側は比高6m前後の南北に延びる馬背状の台地によってさえぎられ、西側もこの尾根から100mほど離れた所に比高8m前後の南北に延びる比較的広い台地があり、これらの尾根によって、両側をはさまれている。中央付近の低地には、小河川が流れており、それに沿って、両側には氾濫源があり、その上に、現況では水田が耕作され、それをさけたような状況で、遺跡は営なまれていた。遺跡を確認する際、前述のとおり氾濫源が広がっているため、遺跡の判断と遺構の把握に手間だったが、試掘調査のおり、石棒1本と多量の縄文土器が出土していることと、表土

を除去する際にも、大型石棒が2本出土している。

検出された遺構は、調査区域内全域に広がり、礫を用いて遺構は構築されており、住居址7軒、大型集石遺構2基、小型集石遺構2基、祭壇状遺構9基、石棺状遺構14基、階段状遺構1基、土壙18基の計54遺構であり、その他に地焼炉、埋焼、埋甕炉、性格不明な配石遺構などがある。上記にあげた遺構数は、昭和61年3月の時点の数字であり、遺跡内の上部構造を確認したのみで、掘り下げおらず、今後の調査によっては、若干の変更が予想され、この点については、前もって御了承いただきたい。

1. 住居址

それでは、検出された遺構を個々に見ていきたいと思う。住居址は7軒検出され、その内分けは、堅穴住居址2軒、敷石住居址2軒、石削い住居址3軒である。堅穴住居址の第4号住居址は、旧水田を造成する際の土手の部分にあたるため、南側半分は削平や櫻乱を受けているため、不明の点はあるが、直徑5m前後の不定円形を呈すると思われる。

第5号住居址は、北から3段目の東端にあり、1辺4m前後の方形をなすと思われるが、西側には、第2号大型集石遺構が、存在することと、調査中に冬期に入り、調査が困難なため、やむをえず、中断せざるをえなかった。

次に、敷石住居址を見てみよう。第1号住居址は、試掘調査を行った際に、発見された住居址である。この住居址は、第1段目の東端にあるため、旧水田を造成する際、削平され、敷石の一部が残るのみであった。現存する部分で復元すると、1辺3m前後の方形を呈すると思われ、北と東は握り拡大の小礫を用い、一列に縱長に並べて、周囲を縁どっている。

この住居内からは、前述のとおり、削平されているため遺物は、ほとんど出土せず、床面から破損した有頭石棒の頭の部分と、大型獸と思われる骨片が出土し、骨片が出土した部分は、真赤に焼けていた。

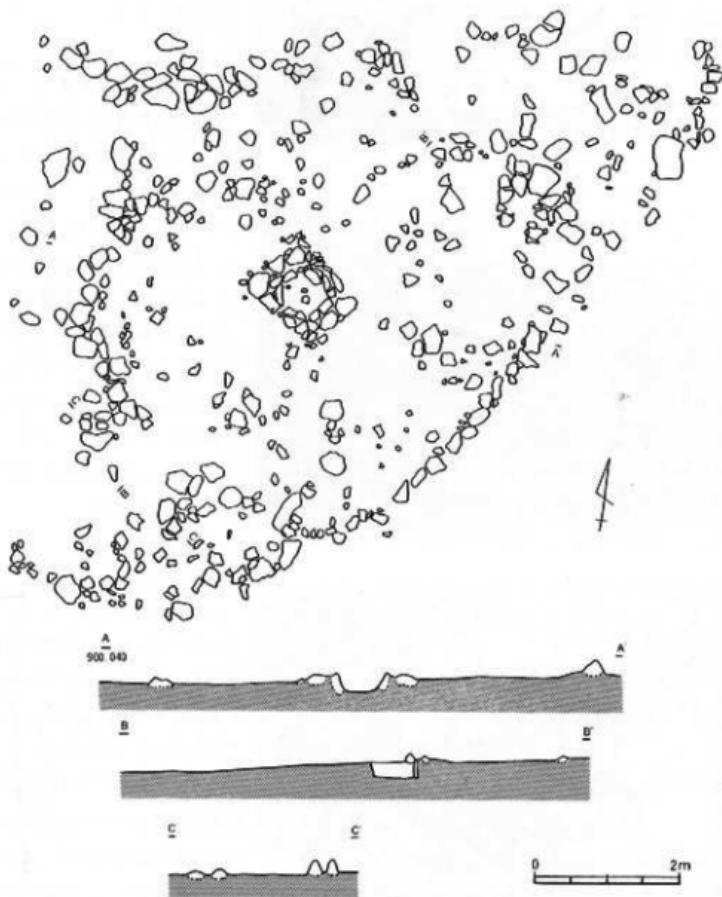
第7号住居址は、第2段目の南西端の、覆土を盛り上げた堆土の直下に位置する。この住居址も、第2号大型集石遺構の一部と並存することと、冬期のため中断した住居址である。

石削い住居址は、人頭大かそれ以上の石を用いた住居址である。そのあり方は、堅穴住居址の、壁際の直下に置かれた石の可能性もあるが、黒色土中に存在するため、掘り込み面などはつかめなかつた。第2号住居址は、第2段目のほぼ中央部に位置し、長径約3m前後、短径約2m前後の東西に長い楕円形を呈し、東側に人口部と見られる、石を配した住居址である。炉は住居址内のほぼ中央部にあり、その北側には、石削いの一部として使用されたと思われる比較大型の石を配し、生活用具の一部として使用されていたのかもしれない。

第3号住居址は、第2号住居址から南東へ5mほど離れた位置にある。東西南には、住居址としての境界線は、一部不明ではあるが、半周以上回り、北の境界線は不明である。

住居址の大きさは、東西5m、南北は不明であるが、4m以上と思われ、ほぼ隅の丸い方形で

あり、南のやや西よりに、出入口と思われる、幅1m、長さ1mの張出し部があり、この出入口と炉を結ぶ線を延長すると、地蔵ヶ岳が真正面に見える位置にある。炉は中央よりやや奥まった所にあり、東西約1.20m、南北約1mの長方形の敷石部を造り、その中に直径50cmの燃焼部がある。この住居址内からは、翡翠製の直径1cmの玉が1個、耳飾りおよそ30個、長さ25cmの緑泥片岩製の石棒1本が、耳飾り、打製石斧、石冠にかこまれた状況で出土している。



第9図 第3号住居址実測図

2、大型集石遺構

石堂遺跡B地区において、主体的な遺構となると思われ、規模が大規模であり、小砾、人頭大の石、巨石、平石などを用いて構築され、その遺構中には丸石、石棒、耳飾り、土器片などが出土している。



図版19 石堂遺跡B地区 第1号住居址(敷石住居址)



図版20 石堂遺跡B地区 第3号住居址(石囲い住居址)



図版21 石堂遺跡B地区 第3号住居址内炉検出状況

第1号大型集石遺構

北の第1段目の旧水田の土手部に残存し、それより南は、水田造成時に削平され、破壊されていた。大きさは、東西約15m、南北約6mの長方形を呈し、この遺構中に、現在把握している遺構は、第1号階段状遺構、第12号石棺状遺構、第13号石棺状状遺構などがあり、その他に、石棒を伴った遺構が1ヵ所と、西端には石を並べ石垣状の遺構が検出されている。

第2号大型集石遺構

第2段目の南端部と第4段目までかかるような、大型の遺構であり、南側は冬期に入ったため調査はできず、西側は耕土の下のため調査はできなかった。確認された遺構は、東西37m、南北27cm、集石部の幅は、7m前後で隅丸長方形あるいは方形を呈すると思われ、名称を付すならば、方形環状集石遺構とな

るだろう。そして、この遺構中より、住居址2軒、石棺状遺構2基、小型集石遺構などが、検出されている。この遺構は、大きな空間を占有し、存在し、その遺構中に、数多くの遺構を包蔵していると思われる。この集石中の東南の隅に、小型集石遺構がある。



図版22 石堂遺跡B地区 第1号大型集石遺構



図版23 石堂遺跡B地区 第1号小型集石遺構



図版24 石堂遺跡B地区 第6号祭壇状遺構

3. 小型集石遺構

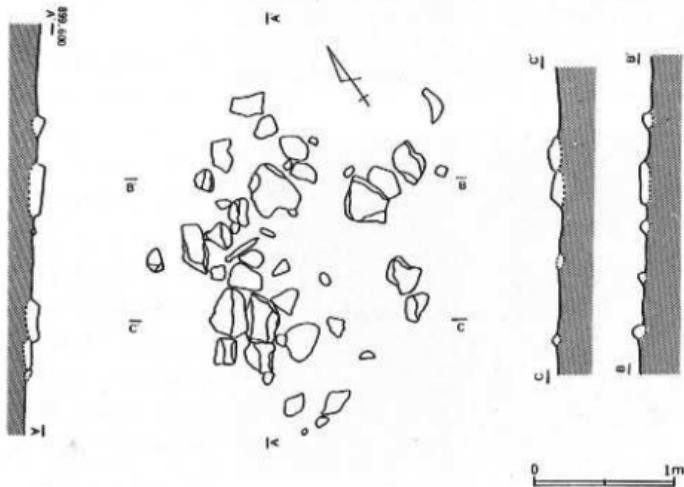
前述の大塀に比して、小型のものを示す。遺構を構成している石は、挙大から人頭大までの河原石や石器およびその破損したもの用いて、造られている。第1号址は、第1段目の、大型集石遺構と第4号住居址との間にある。東西2.50m、南北3.50mの長方形を示すようである。この遺構に第4号住居址は、隣接して立地している。現段階において、上部のみの調査であるため、構造は不明である。

第2号址は、前述の大型集石遺構中の東南の隅にある。一辺4m四方の方形を呈すると思われるが、破壊されているため詳細は不明である。

4. 祭壇状遺構

集石遺構の部類に入ると思われるが、遺構を構成している石

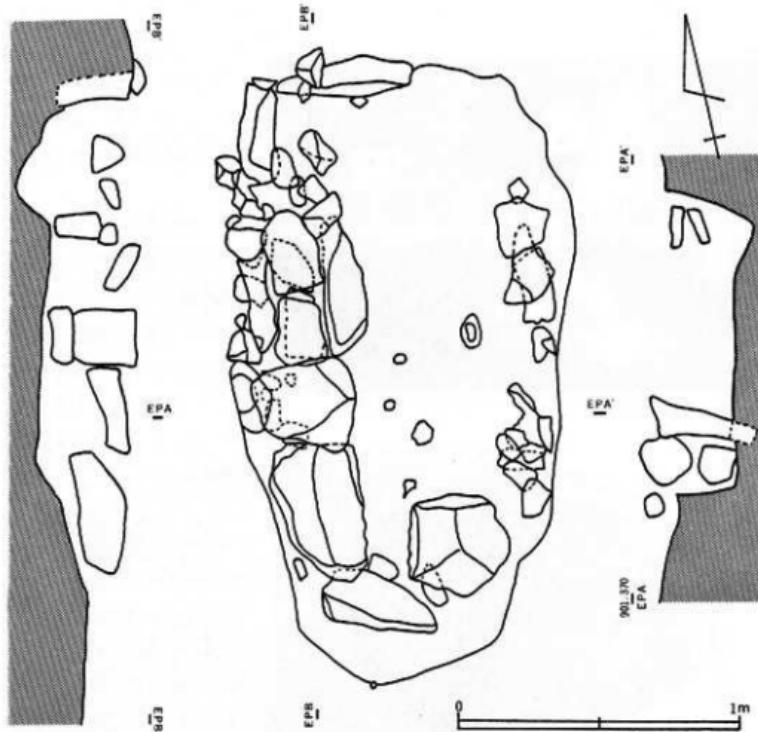
が、極端に少なく、小さくまとまっているものを示す。この遺構中には、立石を伴うもの、小型石棒を伴うもの、中型石棒を伴うもの、遺物を伴わないものなどがある。検出されている遺構のほとんどが、1辺1.50m四方の方形を呈している。



第10図 第6号祭禮状遺構実測図

5. 石棺状遺構

石棺状遺構は、全部で15基発見されているが、そのうち調査を行ったのは7基であり、そのうち5基が、水田を造成する際に、半截された状態であった。形態が、完全に分かる残りの2基も、壁にはめこまれていたと思われる石もはぎされていた。大きさは、長軸が1.50m～2.00m、短軸は0.50m～1.00mであり、調査した石棺状遺構から、副葬品の出土は見られなかった。石棺状遺構の検出状況としては、単独では検出されず、石棺群として、集石遺構中からのものがある。石棺群としては、7つ並ぶもの、3つ並ぶものがあり、集石遺構中からは単独で検出されるものと、並んでいるものがある。



第11図 石堂遺跡B地区 第2号石棺状遺構実測図

6、階段状遺構

この遺構は、平板の石を組み合せて、長さ約2.70m、幅約1mの階段状を呈し、第1段目の第1号集石遺構中に存在するが、遺構の南端部は、壊されているため不明である。

この遺構と同様の遺構を持つ遺跡としては、大泉村の「金生遺跡」がある。

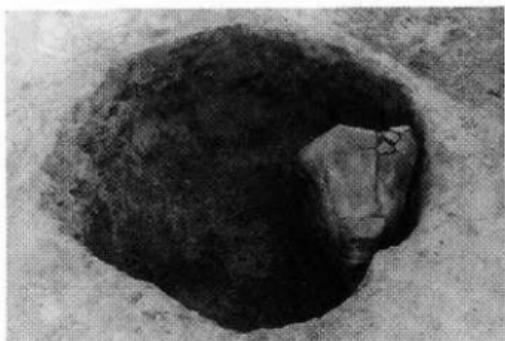
この遺構の上部構造の平石は



図版25 石堂遺跡B地区 第13号石棺状遺構



図版26 石堂遺跡B地区 第3号住居址内特殊遺構



図版27 石堂遺跡B地区 第1号土壙

蓋石として捉えられる、石をはずして下部遺構の調査は、実施していないため、詳明は不明であるが、蓋石を持つ遺構としては、石棺状遺構があげられる。

7. 特殊遺構

第3号住居址内より、検出された遺構である。この遺構を構成する遺物は、緑泥片岩製の長さ25cmの石棒1本を中心にして、その周囲に打製石斧1本、磨石3本、土製耳飾り4個など構成されている。

8. 土 壙

検出されている土壙は、全部で18基あり、全てが第1段目に集中している。第1号土壙より、加曾利E式土器の完形品が、1個体出土している。その他の土壙中からは、遺物の出土は、ほとんど見られなかった。

IV 出 土 遺 物

石堂遺跡B地区より出土した遺物は、石棒、丸石、翡翠製の玉、土版、耳飾り、土偶などの精神生活用具、日常生活用具として、捉えられる石皿、磨石、凹石、磨製石斧、打製石斧、蜂巣石などが出土している。しかし、これらの石器、土器の大半は、集石遺構中より出土しており、一般の生活用具が出土する理由としては、その寿命がきた時、あるいは、祭ることを目的とすることで、集石遺構の一部として、使用されたと思われる。

1. 石 棒



図版28 石堂遺跡B地区 大型石棒出土状況



図版29 石堂遺跡B地区 小型石棒出土状況

遺跡中より、大小合せて22本あまり出土している。大型石棒は、そのうち12本あり、立石として使用され、石棒と思われるものは、3本ある。石棒の石材としては、地元で簡単に採取可能な安山岩系の石を多用している。出土本数は、少ないがその他の石材としては、花崗岩系の石を使用した、有頭石棒がある。これらの石棒が出土した遺構は、大型集石配石遺構や祭壇状遺構あるいは単独で出土している。小型石棒の石材としては、綠泥片岩製のものが大半をしめるが、完形品は1本も出土していない。出土している遺構は、大型石棒同様であるが、住居址内より、出土しているものもある。

2. 丸 石

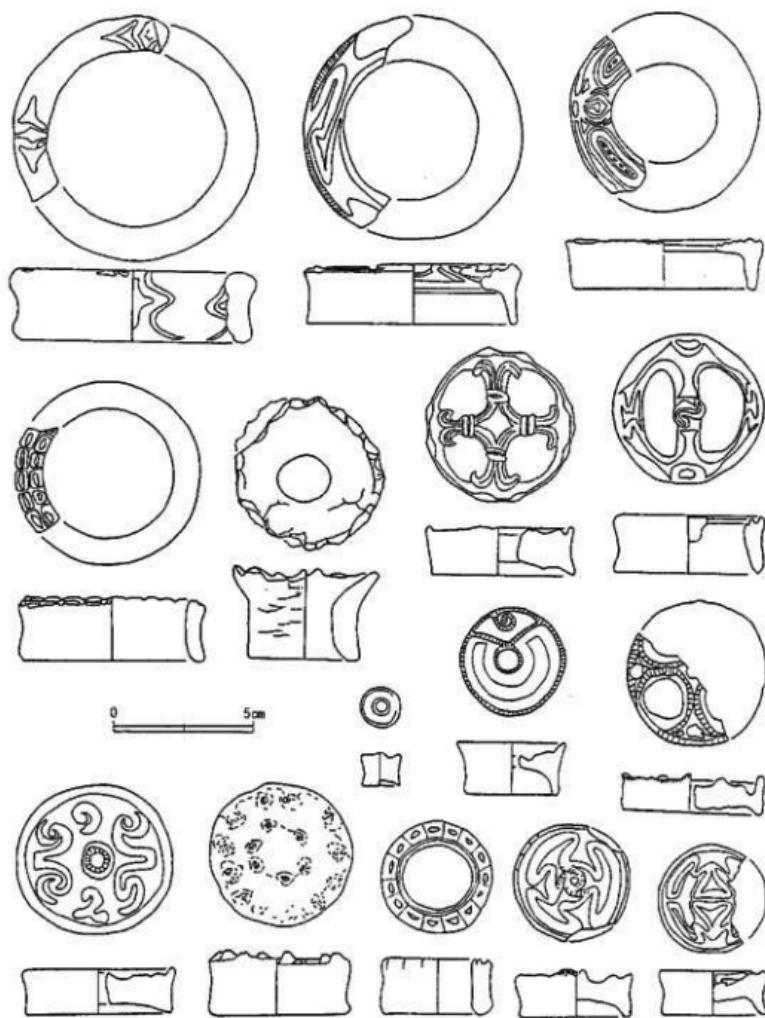
遺跡の遺構内外より、直徑約15cmほどのものが、10個体ほど出土している。器形は、丸を主体とするが、扁平で、梢円形を呈するものもある。石材としては、石棒と同様に、地元の石を使用して、つくられている。

3. 蜂 巢 石

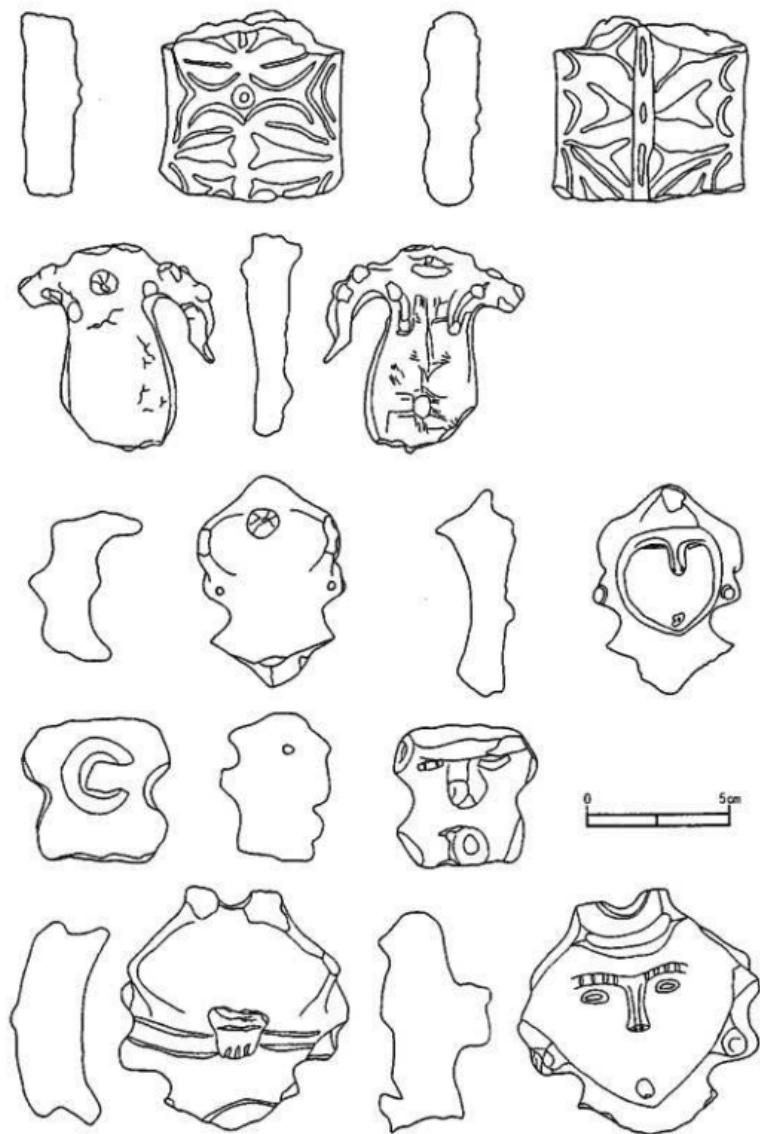
この石器の出土状況は、集石遺構内より、点々と出土しており、住居址内からは、出土していない。出土している石材は、ほとんどが地元の石を使用しており、転用のあとは、見当らない。

4. 翡 翠

現在までに翡翠製の遺物は、6個体出土している。その内分けは、管玉2個、丸玉1個、



第12図 土製耳飾実測図



第13図 土偶実測図

勾玉2個、不定形玉1個であり、住居址および集石遺構付近より出土している。

これらのうち、勾玉の1個は、当遺跡において加工したらしく、穿孔部から、くだけた状態で、出土している。

5. 土偶・土版

当遺跡内からは、土偶は14個体、土版1個体出土している。土偶の頭は、後期の特色であるハート形を呈し、耳飾りを装着する土偶も出土している。頭部に横から貫通する穴を持ち糸を通して、吊せるようにしたものもある。

土版は、南端部の第2号大型集石遺構の集石部から空間部へ移項する場所で出土している。両端部を欠損し、全長は不明であるが、残存部6.5cmあり、表裏両面に彫刻が施されている。

6. 耳飾り

出土している土器を除き、2番目に出土量の多いのが、耳飾りである。欠損、完形品を含めると200個体以上出土している。最小は直径1cm満たないものから、最大は直径約9cmの重量級のものまで出土している。耳飾りの種類としては、装飾性がほとんどなく、粘土版状を呈するもの、装飾性に富むものとがあり、概ねリング状を呈し、欠損した状態で出土する。

出土した耳飾りの数個には、赤色顔料が塗られており、特殊性が見られる。その他としては、全面黒色を呈するものがあり、彩色されているのかもしれない。

V まとめ

以上のことで、若干の考察を行って見たい。

まず、西ノ原遺跡であるが、今回初めて古墳時代前期の遺構が、確認された。今まで標高700mを越える、八ヶ岳南西麓の高冷地では、遺物の確認はされたものの、遺構は検出されず、その時代以降、つまり平安時代初期までは、空白地帯であったが、今後の調査以降によってはその空白の時代を、埋めていけるかもしれない。

西ノ原遺跡において検出された、具体的に年代の判明する遺構は、住居址1軒のみであるが、遺構が存在する地域が、わずかであったためであり、調査の手が広がるにつれて、検出例は増加すると思われる。当遺跡において、遺構は検出されなかったものの、縄文前期頃と思われる、块状耳飾が黑色土中より、1個出土している。現在遺物整理中であるため、不案内ではあるが、縄文前期から中期中葉を含む、複合遺跡であろう。

石堂遺跡A地区は、縄文中期中葉から後葉までと平安時代の遺跡である。この遺跡で検出されている遺構は、平安時代の堅穴住居址1軒だけであるが、縄文式土器は多量に出土してい

る。この土器は、遺跡地のすぐ東側に「野添遺跡」があり、そこから的一部、流れ込みと、水田造成時における擾乱の可能性もある。検出された住居址であるが、北巨摩郡一帯で、検出されている住居址と同様に、柱穴を持たない、石組の東カマドであった。出土した土師器の坏は、すべて床面にふせた状態であり、これらの土器の内側には、炭化物があった。

これらのことにより、推測を許されるならば、家族は3人程度であり、食事の仕度中に出火し、家財道具はほとんど出せない程、火の向りが早く、逃げ出すのが精一杯であったと思われる。

石堂遺跡B地区

出土した遺物によると、縄文中期後葉から晩期初頭であるが、主となる遺構の年代は、縄文後期中葉をはさんだ前後と思われる。しかし、これは遺跡内の最上部とそこに散逸している土器などからであり、今後の調査によっては、若干の変更の可能性もある。

検出されている遺構は、縄文後期を中心とする、配石遺構である。これらは、前述のごとくであり、平面実測図を見ると、一応規則的に配置されているよう見える。一応、第1号大型集石遺構を中心として、捕えるならば、その北側には石棺状遺構の墓群、すぐ南側には祭壇状遺構、その隣には住居址、それをはさんで第2号大型集石遺構（方形環状集石遺構）が存在する。この遺構は、大型の遺構であり、その周辺部に、作居址、祭壇状遺構まで取り込んでいる。当遺跡とほぼ同時代の遺構を持つ遺跡を、周辺部に求めると、高根町の「青木遺跡」、大泉村の「金生遺跡」などがある。これらの遺跡の共通点をさがしてみると、1として、石を多量に使用して遺構を構築、構成している。2として、遺物包含層および遺構面に、白色小片化した獸骨が、一面に散乱していること。3として、遺跡の立地が、縄文中期の遺跡と比較すると、それより一段低く、ゆるやかに傾斜する、斜面に営なまれている。

4として、住居址の北側に、墓域としての石棺状遺構と、祭壇としての集石遺構が存在する。従来、八ヶ岳南西麓において、後、晩期の遺跡の検出例が、少ないため、遺跡数は減少し、希薄化していく、とされていた。たしかに、遺跡数は減少していくのかもしれないが、遺跡・遺構の内容は、一段と濃密になっていくと思われる。そして、そこに表現されている内容を、一言でいうならば、「精神生活の場」としての「宗教遺跡」となり、石堂遺跡B地区においても、それが当てはまるであろう。

出土した遺物は、現在も整理中であるため、概要だけしるしたい。調査中において、顕著に見られた遺物は、耳飾りであった。その総出土数は、約200個体を越えている。それに比べ、土偶は10数個を数えるのみであり、いずれも、石棺状遺構及び祭壇状遺構などから、出土している。

今後の問題点としては、配石遺構を持つ遺跡が並存する場合の相互関係、遺構を構築する際の遺構の有無と時間差（例として、集石遺構中に存在する、石棺状遺構及び階段状遺構との関係）、下部構造及び遺構などの問題があり、広く県内外との遺構、遺物の比較、検討が今後必要とされよう。

おわりに

石堂遺跡は、縄文時代後期を主体とした、配石遺構の遺跡である。これまでに、県内において該期の遺跡としては、都留市周辺を中心とした県東部と、県北部で発見されている。いづれの地域も、富士山あるいは八ヶ岳の雄峰が見えるところである。このことが示す意味は、大きいと思われ、単純に山岳信仰へと結びつけてよいのか、疑問が残るところである。当遺跡においては、上部構造の確認だけで終始してしまい、下部構造及び遺構までは、調査に至ってはいない。今後の調査により、下部構造及び遺構の実態が明らかにされるであろう。最後に、山梨県教育委員会、山梨県埋蔵文化財センターはじめ御協力、御支援を頂いた狭北土地改良事務所、地元の方々、関係諸機関に対し、文末ながら記して感謝いたします。

参考文献

- 山下考司 「坂井南遺跡 埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」 1984 茂崎市教育委員会
中村龍雄 『中部山地 縄文土器集成 諏訪湖周辺考古学 (2)』 1980
中村龍雄 『中部高地 縄文土器文様 (完)』 1985
雨宮正樹 「東久保遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書」 1984 高根町教育委員会
新津 健 「石劍考」 『研究紀要』 2 1985 山梨県立博物館・山梨県埋蔵文化財センター
雄山閣 『縄文文化の研究』 第4、9巻
講談社 『縄文土器大成』 第2、3巻
渡辺 誠 『縄文時代の知識』 東京美術
小野美代子・江坂輝弥校訂 『土偶の知識』 東京美術
神奈川県教育委員会 「下北原遺跡 神奈川県埋蔵文化財調査報告 14」 1977
高山純・佐々木博昭編 「増屋吹上 配石遺構発掘調査報告書 図録編」 1975
大泉村教育委員会 「金生遺跡」 1981

高根町埋蔵文化財 第3集
昭和61年3月25日 印 刷
昭和61年3月31日 発 行

西ノ原遺跡・石堂遺跡

発 挖 調 査 概 報

発行所 高根町教育委員会
印刷所 緋北印刷株

